

永平寺所蔵『道正庵文書』に見る 近世における蘭溪道隆像の諸相

海老澤 早苗

一 はじめに

小稿は、道正庵十九世木下卜順（一六一六—一六九〇）によって撰述された寛永十六年（一六三九）正月二十五日の「道正庵四世典薬頭伝」、および慶安五年（一六五二）八月二十八日の「道元禅师四百回忌祭文」を中心史料とし、近世における蘭溪道隆（一一三—一二七八）像の一端を窺うことを主な目的とする。そして、木下卜順のそのような蘭溪道隆像の描写理由に迫り、当該期、両史料が担ったであろう役割を推察したい。

また、論考を進めていく中において、道正庵解毒万病円に関する新たな史料紹介を試み、小稿の深邃を図りたい。

二 『道正庵文書』に就いて

道正庵とは、道元とともに日宋したと伝えられている木下道正（藤原隆英）（一一七一—一二四八）が開創した寺院であり、

現在その旧跡は、京都市上京区道正町の木下家にある。江戸時代の道正庵の役割は、曹洞宗の僧侶が瑞世などのために宮中に参内する際、伝奏勸修寺家への取り次ぎを行うとともに宿坊となり、進退作法を指導することであった。また、神仙解毒万病円という薬を製造し、全国の曹洞宗寺院に独占的に販売した。『道正庵文書』とは、この道正庵に所蔵されている古文書類であり、その詳細については、今後刊行予定である『永平寺史料全書』道正庵文書編を参照されたい。

三 「道正庵四世典薬頭伝」「道元禅师四百回忌祭文」と木下卜順に就いて

「道正庵四世典薬頭伝」は、道正庵四世藤原忠俊（？—一三四〇）の出生、人柄及び典薬頭として活動した生涯などを記した伝記である。^{〔一〕}

「道元禅师四百回忌祭文」は、本祭文を記すことに対する卜順の謙遜の辞に始まり、道元の顕彰、伝記などが記され、

この祭文が永平寺第二十七世高国英峻（？—一六七四）の強い勸奨により作成されたことの表明により結ばれている。なお道元の伝記には、道正庵神仙解毒万病円の由来に就いての記載が含まれる⁽³⁾。

これら二つの史料を撰述した木下卜順は、道正庵十九世中興として知られ、父は同十八世休甫、母は益田氏左近将監源高胤の女である。元禄三年（一六九〇）八月十三日、七十五歳にて示寂している。

四 「道正庵四世典薬頭伝」「道元禅師四百回忌祭文」への蘭溪道隆の起用に就いて

現在までの管見では、『道正庵文書』中、上記二史料にのみ蘭溪道隆の姿が確認出来る。前者には、血痢（赤痢）を患い瀕死の状況に陥った蘭溪が、忠俊の治療により蘇生する様子が記されている。そして後者には、北条時頼が蘭溪道隆を建長寺の住持に指名したのは、道元が思いを巡らせた上での推挙による、という下りが記されている。

では何故両史料に、京都、木下家の医師が、鎌倉における蘭溪の命を救うという内容や、建長寺建立にあたって、北条時頼に対する道元のはたらきかけがあったような記載がなされたのであろうか。

その理由の考察において、道元、蘭溪道隆間の道交という

問題は注目に値するであろう。両者の道交については諸説あるが、先学達に道交を推察させた主な史料は、『建誓記』に収録された往復書簡である⁽⁴⁾。その書簡において蘭溪は、道元に対し賛辞を尽くしている。それに対して道元は返書において、いわば形式的ともいえる讃仰の念を記すに止まっている。このような両者の書簡の内容から窺える道交のあり方が、道元の知名度を不動なものとし、その関係性を強調することによって、木下家の格式を高めたいと考えていたであろう卜順に、藤原忠俊が蘭溪に対し救済の手を差し伸べる、あるいは道元が蘭溪を推挙するという行動を描写させたと考える。

五 道正庵神仙解毒万病円に就いて

飯塚大展氏は、『増補家伝預業集』巻五、『本朝世事談綺』、『江戸名所図会』巻七などに道正庵神仙解毒万病円（以下解毒万病円）関連の記載があることを指摘されている。そして浮世草子や浄瑠璃にみえる「道正坊」は、寺院製の薬を行商しつつ祈禱鉢叩きなどを行う願人坊主をさすこと、またこれらの逸話をモチーフとしている説経節に、「越前国永平寺開山記」があることも提示されている⁽⁵⁾。

また、吉田道興氏は、『管蠡備急方』中巻や『神官医方史』に「神仙解毒万病円（丸）」に関する言及がなされていることを指摘され、道元伝における当該薬の初出は、『僧譜冠字

韻類」「道元伝」であり、次いで『訂補建撕記』が挙げられると述べられている。⁽⁶⁾

そこで小稿では、解毒万病円の記載が、天和二年（一六八二）から貞享三年（一六八六）に、歴史家の黒川道祐によって記された、山城国に関する地誌、『雍州府志』巻第六「土産門上」薬品の部に、

万病解毒円 古有一片山隆盈者剃髮後号「道正」古斯辺惣号「松木島」松樹数株其蔭繁茂景愛尼寺等亦在其間因或称「木下」故世称「木下道正」曾従「永平寺」開祖道元和尚「入」宋道元遍参「中華」宿德「所」々經歷之間中俄尔病発氣息將「絶」時一老翁忽然来謂於「我國」近隣之名衲也如何失「之」哉則与「一丸」藥一病立痊斯時老翁謂「道正」尔不「辭」跋渉「從」師之志惟深今我授「所」用一丸之藥方「歸」本朝「至」子孫「為」家業「須」救「諸」人之疾苦「我」是「日本」稻荷神也言終失「其」所「往」則今解毒円是也帰朝後家内勸「請」稻荷明神「于」今存矣道元始在「深草」仏徳山興正寺「寺」去「稻荷社」不「遠」故被「称」近隣「尔」後興聖寺中絶近世再建「興正寺」於「宇治郡」凡解毒円流「布」日本国裏「至」三「兒童」走卒「無」不「識」道正解毒「者」且自「元」祖道正「至」今「三十七」代相「統」其家「誠」奇哉是皆依「稻荷神」之冥助「者」乎⁽⁷⁾

と記載があること。また、浮世草子の作者であり俳人でもある磯貝舟也によって元禄四年（一六九二）に著された、日本全国の地誌『日本鹿子』巻第四「武蔵国中古今之名物部類」にも
神仙解毒万病円 田代養山与⁽⁸⁾

と記されていることを付け加えたい。『日本鹿子』に記載された田代養山とは、福井藩士、江戸幕府の医官としても活動した人物である。

当時の解毒剤としては、「越後の毒消し」として知られる「毒消丸」の存在も注目されよう。⁽⁹⁾ このように近世における解毒剤は、解毒万病円の他にも多種多様に存在していた。

『雍州府志』に記されたように、解毒万病円は日本全国に流布していたと考えられる。そして、廣瀬良弘氏も指摘されるように、当該品は諸国に配布されていたようである。⁽¹⁰⁾ また、「似解毒」あるいは「似解毒円」の偽薬の販売者も存在し、それに対して訴訟が行われていることが貞享二年（一六八五）頃の『道正庵文書』より窺うことができる。

このように解毒万病円が注目されるに至った理由の一つとして、筆者は日本禅宗成立の立役者ともいえる蘭溪道隆を木下卜順が「道正庵四世典薬頭伝」や「道元禅師四百回忌祭文」に先述のように登場させたことを指摘したい。

六 おわりに

吉田道興氏によれば、木下卜順は、両本山をはじめ全国の有力寺院へ贈答品を贈り、解毒万病円の販売を促進する仕組みを考案実施し、道正庵の中興と称されていたようである。そしてそのような経緯から、氏は卜順を策謀家と評してい

〔11〕従って小稿において窺った蘭溪道隆像の描写理由を、その策謀の一つと考えるのも否定し難いのではないだろうか。

そして両史料は、そのような卜順の一面面を示唆していると共に、当時、複数の解毒剤が出回っていたことを鑑みるなら、道正庵の解毒万病円の販売を促進する役割を担っていたと推察することができよう。

また、今回紹介した解毒万病円に関する新たな史料から、その薬が土産物や名物として人々に認識されていることが明らかとなった。単なる医薬品としてではなく、土産物や名物として解毒万病円が広く人々の手に行き渡るためには、背景として様々な説話的要素を踏まえた物語が付与されていたであろう。小稿では、その物語形成において一役を担ったものとして、『道正庵文書』に見られる近世の蘭溪道隆像を捉えておきたい。

史料全書』文書編第一巻、六四八頁。

11 吉田「二〇二一」。

〈参考文献〉

鏡島元隆「永平道元と蘭溪道隆」『道元禪師とその周辺』大東出版社、一九八五

佐藤秀孝「道元と蘭溪道隆——両者の往復尺牘の真偽をめぐって——」『道元禪師七五〇回大遠忌記念出版 道元禪師研究論集』大本山永平寺、二〇〇二

佐藤秀孝「蘭溪道隆の来日と永平寺道元」『禅文化』第三二八号、二〇一三

佐藤康行『毒消し売りの社会史——日本経済評論社、二〇〇二

中世古祥道「道元禪師と蘭溪道隆との道交問題」『道元禪師伝研究 統』国書刊行会、一九九七

廣瀬良弘「中・近世における木下道正庵と曹洞宗教団」『道元禪師七五〇回大遠忌記念出版道元禪師研究論集』大本山永平寺、二〇〇二

吉田道興「高祖伝の形成と道正庵——策謀家道正庵十九世徳幽卜順——」『曹洞宗総合研究センター学術大会紀要』第一二回、二〇一一

（キーワード） 永平寺、道正庵、道元、蘭溪道隆、木下卜順、神仙解毒万病円

（駒澤大学禅研究所研究員・博士（仏教学））

- 1 『永平寺史料全書』文書編第三巻、二二七頁。
- 2 『永平寺史料全書』文書編第二巻、三一七頁。
- 3 鏡島「一九八五」。
- 4 曹洞宗全書「二〇〇二」二〇三、中世古「一九九七」。
- 5 『永平寺史料全書』文書編第二巻、二二—二三頁。
- 6 『永平寺史料全書』文書編第二巻、四九二頁。
- 7 『統々群書類従』八、一六一頁。
- 8 久富哲雄解題『日本鹿子』（クレス出版、一九九四、一三六頁）。
- 9 佐藤康行「二〇〇二」。
- 10 廣瀬「二〇〇二」、『永平寺